資料②

第五回 斐伊川流域の水辺を考える懇談会

斐伊川流域の水辺のあり方

～宍道湖・大橋川の水辺のあり方（案）～

平成19年3月

斐伊川流域の水辺を考える懇談会

はじめに

斐伊川流域の人々の暮らしは、洪水防御と新田開発、用水確保、舟運の発展など斐伊川の変遷とともにあり、沿川の人々の暮らしは、斐伊川のもたらす恵みを享受しながら発展してきた。流域の暮らしは今も斐伊川と密接なかかわりを持っており、これからの流域における地域づくりを考えるに際しては、この斐伊川の水や自然、景観などをどう捉え、どう向き合っていくのかが大きなテーマとなる。

斐伊川流域の中でも、美しい景観を保ち、地域のシンボルとして愛されている宍道湖は、島根県を代表する観光資源であり、周辺では近年も斐川なぎさ公園、白潟公園、岸公園などの湖畔公園、水辺を活かした県立美術館や宍道湖ネイチャーランドの整備、堀川遊覧船が運航する松江堀川の導水事業など、地域づくりへの活用が進んでいる。

さらに、後世に残すべき風景として宍道湖水辺八景が選定されるなど、水辺と暮らしのあり方を考える多くの材料を提供している。

経済の衰退や加速する少子高齢化などの課題を克服し、斐伊川流域が活力ある地域を創造してゆくには、地域への愛着を取り戻し、地域資源をうまく活用していく視点と努力が欠かせない。

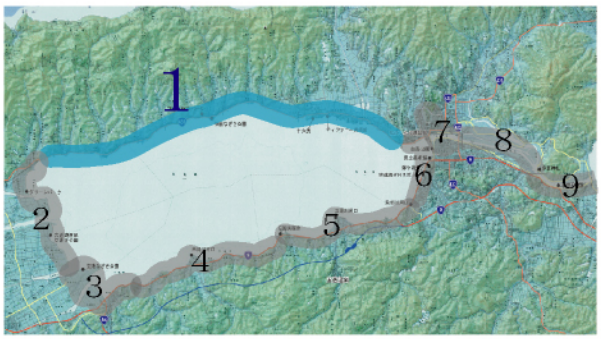
そこで、将来にわたる斐伊川流域発展の一助とすべく、斐伊川流域である宍道湖・大橋川の地域づくりや水辺景観のあり方などについて提言する。

平成19年3月

斐伊川流域の水辺を考える懇談会

1 【変化に富んだ景勝をつなぐ水辺】

宍道湖北岸（松江しんじ湖温泉入り口～鹿園寺灘付近）



キーワード：
{自然：山並み、景勝地}
{人：車窓、里山、親水空間}
{感覚：変化のある風景}

自然豊かな西岸と松江市街地をつなぐ架け橋の役割を担う地域である。集落、田園、山地が織りなす里山の陰影を宍道湖の背後に抱えつつ、自然から都市への移り変わりを感じることができる。

宍道湖岸まで迫る山並み、山裾までひだのように広がる田園、点在する集落群、これらを繰り返し縫うように進む鉄道や道路からは、起伏に富んだ地形をなぞっていくことで、時にきらめく湖面が風景に彩りを与えていることに気づかされる。

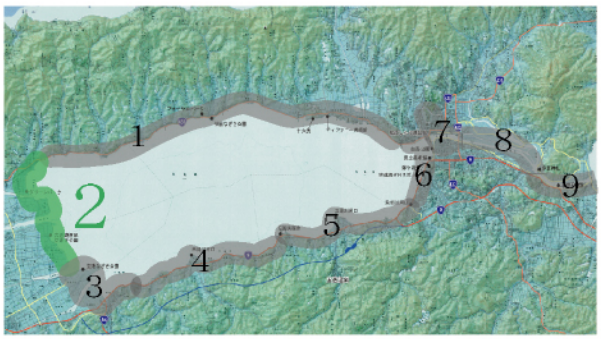
また、秋鹿なぎさ公園などの点在する親水空間は、ゆっくりと心ゆくまで水辺に触れる機会と空間を与え、十六禿などの景勝地は、風景にとって絶妙なアクセントを与えている。

この地域は、湖岸と道路の間の限られた空間にヨシなどを植栽することで、宍道湖の水辺と里山の境界を近づけ、周囲の集落、田園、山地に違和感なく溶け込む印象を醸し出し、サイクリングや散策を楽しむ人々が移動の合間にちょっと立ち止まりたくなるような、魅力的な親水空間を創造する。

また、この地域を通る視点からだけでなく、宍道湖西岸や南岸からの遠望も意識した上で、変化に富んだ独特の風景を壊さぬよう、背後の緩やかな山並みと調和した水辺となるよう配慮する。

2【自然と人のふれあいを育む水辺】

宍道湖西岸（鹿園寺灘付近～五右衛門川）



キーワード：
{自然：水鳥、水生生物}
{人：親水空間、自然とのふれあい、学習}
{感覚：共生}

護岸の前面にある砂浜やヨシ帯の多くは人工的に再生された湖岸であるが、現在は鳥たちの採食場・休息場、魚介類の産卵場など、生物にとって欠くことの出来ない営みの場として、周辺の生態系のひとつに組み込まれている。

この水辺は、背後に広がる出雲平野特有の点在する築地松のある民家を抱く景観と一体を成すことで、自然と人間の営みとが絶妙な間合いで調和していることに気づかされる地域である。

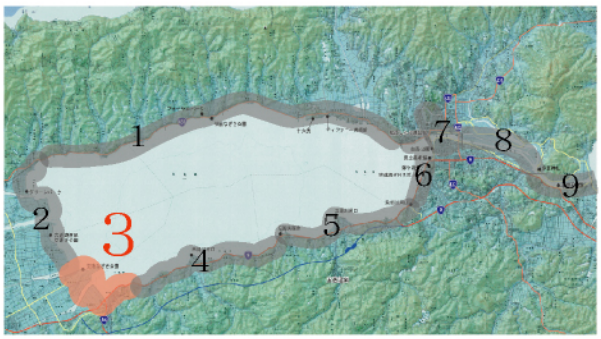
最近は、浅く穏やかに整備された水辺に入り、自然とふれあいながら生態系を学ぶ環境学習の場としての利用もみられ、環境に配慮した湖岸整備のあり方を示す場の代表として広く知られている。

この地域は、自然とふれあうことができる水辺として、さらなる利用促進を図っていくために、引き続き砂浜やヨシ帯の再生など水辺環境の保全に取り組む。

また、さまざまな生態系を育み、自然とふれあいながら学習できる場を存続していくためにも、浅場や干潟など多様な水辺空間となるよう配慮する。

3【湖面に人々を誘う水辺】

（五右衛門川～宍道中学校付近）



キーワード：
{自然：水鳥、玄関口}
{人：釣り、親水空間、交通流}
{感覚：自然の静と人の動}

国道９号と国道54号の結節点に位置し、出雲空港や山陰道宍道インターを有する交通の要所を担う地域である。

広島県や島根県西部など、南西方面から訪れる人々にとっては宍道湖を臨む風景に初めて接する場所であり、松江市街地から湖岸を移動してきた人々にとっては水辺を名残惜しむ地点でもある。付近の水辺では釣りを楽しむ人々も見られる。

空の玄関口である出雲空港周辺には空港なぎさ公園が整備され、砂浜と宍道湖の風景を楽しむことができる親水空間からは迫力ある飛行機の離発着を間近に見ることができる。

水辺の背後に住まう農家により植えられ夏には咲き乱れる向日葵や、物流の動脈として陸空をダイナミックに行き交う交通は、活発な人々の営みを感じさせるものの、ふと他方に目を向けると、隣に広がる水田が鳥たちの貴重な採食場・休息場になっており、人と自然が活動の中でバランスを保ちながら共存していることに気づく。

この地域は、宍道湖の西の玄関口として人々の活動や生活と、水辺との関わりの近さを印象づけるような、砂浜やヨシ帯の再生による親水空間を創造する。

また、人々が集いやすい空間を創出することで、水辺に近づきふれあえる場として、訪れた人々が宍道湖に対する期待で胸をふくらませながら寄道をしたくなる水辺となるよう配慮する。